

大阪市イノベーション促進評議会 第3回 会議録

1. 日時 平成26年3月26日(水) 9:30~11:00
2. 場所 大阪イノベーションハブ (WEB会議)
3. 出席者
校條委員長、松本委員、外村委員、吉原委員
事務局 (吉川理事、山口部長、折原課長ほか)

■会議概要

平成25年度事業について、平成26年度事業の方向性について

■1. はじめに

(校條委員長)

- ・グローバルイノベーション創出支援事業を開始して1年を経ての開催となる今回の評議会の主な目的は2点ある。
1点目は行政として行っている事業であるので、定量的に評価する必要があるということ。2点目は、定性的な評価として(私個人としては大変努力いただいてたくさん成果が上がったと思っているのだが)、この一年間での良かった点、悪かった点、反省点等あれば議論いただいて来年以降の施策にもつなげていきたいということである。できるだけ2点目の方に時間を多く取りたいと思っている。時間が限られているので数字(定量的な話)の方はそれほど時間をかけずに進めたいと思う。
- ・事務局から資料の説明を、まずは平成25年度グローバルイノベーション創出支援事業の実施状況・成果とした資料から願います。

(事務局)

- ・資料「平成25年度グローバルイノベーション創出支援事業の実施状況・成果」について説明。

(校條委員長)

- ・本論の資料の説明に入る前に松本さん、吉原さん、外村さん、なにかありますか。

(吉原委員)

- ・実際の成果は他の資料で出されると思うが、全体的に立派な成果が出ていて、さらに加速するような勢いを感じた。

(松本委員)

- ・非常に大きな成果に向けて動き出しているという非常に良い印象。

(校條委員長)

- ・印象をお持ちいただいたところで実施状況及び成果という資料に移りたい。
事務局から説明をお願いします。

(事務局)

- ・資料「平成25年度事業に係る目標設定とアウトカム（成果）」について、説明。

(校條委員長)

- ・ご質問、ご意見などありますか。

(外村委員)

- ・一年前に市がやって盛り上がるのかと半信半疑でおられた方も多いのではないかと思います。ふたを開けて見たら他のお二方もおっしゃったように非常にアクティビティレベルが高く、イベント開催回数という量的な点だけでなく、イベント参加者の意識やアウトプットの出来栄といった質的な点でも大変中身のあるものになった。事業が始まる前に、「過去に大阪に力を使ったけど全然だめだった」ということをかなり言ったんだが、そこからするとかなり嬉しい誤算であった。皆さん大変実行力があるというか、まわりが出したアイデアもあったかもしれないがそれをきっちり実行された、ある意味愚直におやりになったということは、私個人だけではなく世間一般的にも非常に評価が高いことではないかと思う。現場の皆さんも非常に高く評価されているのではないかと思っている。
- ・日本全体のためには、大阪で一年間でここまでやったことについて、こういう風にプランを立ててこういう風にやることがキーだった、というようなポイントをまとめて、名古屋であるとか金沢であるとか福岡であるとかそういったところに横展開してあげるのも新しく出たリーダーの一人としてやられたらよいのではないか。東京はもともとあった、あったがゆえにそんなに変化もしない。大阪はあんまりなかったんだけど、ここまでできたということを通じて他のところ、特に地方で今何もないけどもやる気だけはあるところに伝える機会を持たれると日本全体に波及して非常にいいのではないかと期待している。
- ・情報発信の方も、最初に想定していたよりも皆さん非常に頑張られたと思う。イノベーションハブがオープンした頃の頃に、魅力的な最先端のイベントをもってきて、それが理解できるIT系などのコアユーザーを取り込み、そのあと、より馴染みやすいイベントを多く設定して皆さんに足しげく通ってもらう、あるいはブログ等にも書いてもらうという地道な取り組みが実を結んで大変よかったんじゃないかと思う。あえて改善点を言うならば、一つはなぜかフェイスブックの「いいね」が少ないという点。ほかのコミュニティ形成やプロジェクト創出の盛り上がりを見ればフェイスブックはもっと数がいってもいいなというのが私の直感的な意見で、これから先の課題とされてもいいのかなと。もちろん、目標よりは良かったのだが、このアクティビティレベルであればもっといってもいいのかなと思う。
- ・それともう一つは英語でかなりイベント告知はされたようだが世界に響いていない。1年目からあれもこれもは無理だと思うが、一年目の事業の概要や、今回の国際会議

の内容、あるいは今後の事業から出てくる様々な面白い事柄を、世界中で同じような取り組みをしている所とお互いに情報発信していったらよい。そして例えばそれがシンガポールや、あるいはロンドンで報道されるというようなリレーを作っていくような努力をした方がいいんじゃないかなと。

- ・特にこの事業の立ち上げのときには、志を大きく、やっぱり英語での情報発信というのと、大阪が盛り上がるとか日本が盛り上がるじゃなくてゆくゆくは世界に影響するという目標を掲げていたわけで。そこに立ち返ると、ここまで現場のイベント等がうまくいった以上、よりプロアクティブな情報発信、コミュニティ形成を英語でやるということに来年度以降、力点を置けば良いのではないかなと思う。
- ・コミュニティ形成、プロジェクト創出については、総じて非常に素晴らしかったと思うが、特に、大阪でしかできないような取り組み、例えばシャープやパナソニックといった大企業でありながら胸襟を開いて一緒にやろうという関西の大企業との連携が見られたのが大変良かった。
これをもうちょっと進めて、会社で埋もれていた人材が大阪イノベーションハブに来ることによって活性化して何か新しいものを作る、そしてその後、そのまま会社にもいいベンチャーを立ち上げてもいいというような動きにつながれば良いと思う。
- ・人材を掘り起こし、新しいアイデアが形になって、会社外やあるいは世界に羽ばたく…特に「大きな会社」からそういうことが起こる…そういうことが実現できる場になれば素晴らしいんじゃないかなと思っている。
- ・一回目の国際会議は確かに「賑やか」な感じも必要だったが、2回目の国際会議は中身としてより充実して、イベントとしてのイベントではなくちゃんと中身を議論するものとなっていた。これもそれまでの小規模なイベントがたくさんあったがゆえに、何を語らなくてはいけないのか、誰を呼ばなくてはいけないのかというところが非常にはっきりしたというのがあって、そこだけ取り出したとしても聞いて為になる、取材して意味のあるものになっていたと思う。その辺がユーストリームの急激な視聴者の増加等につながったと思う。もっと言えば、この内容だったらもう少し増えてもいいかなと思うのでこれに甘んじずにもう少し広報・告知をやるということは忘れない方がいいかなと。とすると、来年度の目標は4倍くらいにさせていただいた方がいいかなと思う。

(校條委員長)

- ・盛りだくさんの素晴らしい意見をありがとうございました。
- ・松本委員、吉原委員いかがでしょうか。

(松本委員)

- ・まず情報発信の100件について、情報発信は数も大事だが、メディアに好意的に取り上げられているということを知っていただくということが大事。全国紙に取り上げられているので大阪の人以外も結構見ておられる。内容的に非常にいい取り上

げられ方をされているということを読まれた方以外にもどうやって発信するかということも大事だと思う。例えばコミュニティ形成のところなんかでもイベントを何回打ったということではなくて、その中からどんなコミュニティが継続的に形成されてそこからどういう動きがあったかというようなアウトプットをうまく知っていただくように情報発信につなげていくということが大事だと思う。我々は非常に深く関わっているので、ものすごく成果が出ているということは実感として感じるのだが大阪で何が起きているかということを知らない方が多いだろう。やはりこういう全国紙とかいろいろな所に取り上げられているということをやうまく伝える工夫が必要だ。

- ・プロジェクト創出については人にフォーカスを当てて情報発信するのがよいと思う。例えば、大企業の社員の方がイノベーションハブのイベントに参加することにより、どのように意識が変わって、それをどう行動に繋げていったかというような事例を発信する。これは企業の人に協力していただかないと難しいかもしれないが、そのような、「人にフォーカスをあてたケーススタディ」のようなものを情報発信につなげていくということをやられてはどうか。せっかく成果が出ているので、その成果を情報発信のまとめにどう伝えていくか、どこに伝えていくか…最後は世界にだろうが、まずは日本全体に伝えて次は世界にということころかもしれないし、世界に伝えることによって例えばロンドンで非常に大阪市の取り組みが注目されているということを利用して日本に伝えるということもぜひやっていただければと思っている。

(校條委員長)

- ・一時的な広告・広報からさらに実際に起きた成功例、そういったものを二次的にさらにより広く広報していくという発想ですね。素晴らしいご意見だと思います。吉原委員は何かありますか。

(吉原委員)

- ・先ほども申し上げたが大変よくやっていると思う。私の期待度が低かったせいかもしれないが、実際の成果を見て皆さんの頑張りがよく伝わってくる。大変良い一年だったと純粋に評価している。情報発信、コミュニティ形成・連結、プロジェクト創出、ショーケースと…4つにわかれているところだが、皆さん注目するところは結果としてプロジェクト創出になると思う。一年目はうまくいったということで逆にあまりあれもこれもとやらずにせっかく勢いがあるのだからフォーカスをあててお互いが相乗効果を生み出すような形でプロセスにより一層改善を加えてもらってプロジェクト創出にフォーカスをあててほしい。
- ・唯一がっかりしたのはオープンイノベーションとかイノベーションエクステンジに参加している企業が期待していたよりもかなり少ないということ。関西は東大阪ばかりじゃなく尼崎も大変優良な企業とか職人型の会社が結構あって、イノベーションとか無形の資産について造詣が深い会社が山ほどあると思うのでそこをぜひ深掘りして、企業におけるオープンイノベーションの動きを一層加速してほしい。
- ・私は当初、プロジェクト創出の目標 20 件当たりでいいんじゃないかということでサ

ポートはしたが、正直なところ倍くらいいいくんじゃないかと内心思っていた。ただパイプラインであるコミュニティ形成・連結、認知度を高めるという情報発信という側面を見れば来年は 22 件という数字ではなくもっと高い数字になってもおかしくないんじゃないかなと、そういう感覚である。

(校條委員長)

- ・吉原委員の意見に続いて一言申し上げると、期待が低かったとおっしゃっていましたが、私の印象からすると、無風状態だったところに大きな上昇気流を作ったらどんどん風が起きたということだと思うが、意外にその気流に乗ってこなかったのが企業だったという感覚。パナソニックさんとかシャープさんの取組みとかあったが、関西、特に大阪にはいろんな技術を持った企業があるといわれながらその企業さん達があまり出てこなかったという印象があった。その辺は強みと思っていたものがちゃんと強みになっていないというところは感じた。
- ・これは次の議論になるが、この先大阪市ばかりが頑張って事業づくりをしてもこれは地域の経済発展にならないので、今日的な発想としてはスーパープロデューサーあるいはハッカーズクラブに所属しているような人たちがどんどん強くなって、いろんな事業をプロデュースしてあちこちの会社を引っ張ってくるとかいう活動がおきてくるのが理想だと思う。そうすると倍々で伸びていくので。その辺が来年度はチャレンジなのかと個人的には思っている。
- ・以上で各委員の意見は出揃ったが、追加の意見がある方はどうぞ。

(松本委員)

- ・日本の大手企業の注目度をもっと上げなくてはいけないというところが大きな課題。最近、東京でオープンイノベーション推進者交流会議というものはじめた。まだオープンイノベーションの部署を持っている日本の大手企業は少ないので 5 社くらい集まったらいいかなと思っていたが、30 社以上が集まって毎月意見交換をしながら課題をもとにグループワークをやっている。そういう 30 社のオープンイノベーションの担い手たちがこの大阪イノベーションハブをみて興味を持つのは、プロジェクトがどういうプロセスで生み出されていくのかということだと思う。
- ・また、まだ成功していなくても 20 のプロジェクトの中で一つでも二つでもこんなケースがありますよということが見えれば、興味を持ってパナソニック、シャープに続く 30 社がここにくるかもしれない。プロジェクト創出のところを来年度はもっと力を入れて「見える化」する、情報発信につなげていくということが重要であると思う。

(校條委員長)

- ・ありがとうございました。

(外村委員)

- ・最近私は大企業に働きかけてどうにかオープンイノベーションに持っていくというの
は思っていたよりもずっと難しく、大阪もそうなのかもしれないが向こうが拒否して

しまっただけ働かなくても…という感じもいろんなところでして、もともとあまり技術を持っていないと思われているような会社で企画力があるところが、技術は他から買ってよそに作らせてやる、それで早くリーンに新しいものを作る、そういうケースが増えており、非常に面白いと思う。なので、いわゆるもともとの電機メーカーとかではなく、昔は文房具屋だったとか問屋だったとかそういうところから面白いものが出てきそうなどころがあるので、あまりものづくりにこだわり過ぎずに、もともとは技術会社じゃなくてアイデア勝負みたいな会社も入れたような集まりでお互いを刺激するようなことをやった方が、結果的に大企業も目が覚めるのではないかと、思っている。

(外村委員)

- ・FBの「いいね」数は2000とあるが、FBページやブランドとしてOsaka Innovation HubのほかHack Osakaなど複数がありわかりづらくなっている。

(校條委員長)

- ・おっしゃるようにいろんなブランド、Hack Osakaとか、Osaka Innovation Hubとかブランド的にもすごく交錯していてこれは一つ課題。

(校條委員長)

- ・大阪市の方で来年度に向けていろいろ議論したいという点が主に二つあると聞いているので、事務局から説明をお願いします。

(事務局)

- ・委員長の方からありましたように論点は大きく二つ。26年度事業の方向性についてというペーパーをご用意しているので、今のご議論と重なる部分もあるのだがご説明し、論点に移っていきたい。

(校條委員長)

- ・来年に向けてどういった方向で行ったらいいかというところだが、大きく言うと継続して頑張りましょうという側面と、さらに発展させていく必要があるという側面がある。それからもう一つの方向性としては、グローバルに繋がっていくことが大事であるという話と逆にフォーカスして集中してプロジェクト創出を図りましょうという話がある。いろいろあるが全部議論できればいいが、どのようにお考えか。委員の皆さん、ご意見ををお願いします。

(吉原委員)

- ・今のプレゼンテーションは大変わかりやすく、よくまとまっていて、今のお話のまま進めていただければ大変良い26年度になるんじゃないかなと思う。いろんな意見がある中で、限られた資源を使い、3カ年事業の2年目ということで一つの大きな問いを問い続ける必要があるのは、大阪市として3カ年の事業終了後にこのハブとかイノベーションのイニシアティブについて、その先、何をめざしているのかということ

模索する 26 年度になるべきだと思う。私が言っている意味は、現段階では、大変良い勢いで進んでいる中で、一方で大阪市の財政赤字が続く中、市の予算がどう繋いでいくのか、それから政治の不確実性、これからどのような方向で政治が動くのかということ踏まえても、この 1 年間をもって、3 年終わった後に何をしたいのかということの評議会、それから実際に現場でお仕事をされている方々が強い意志を持って一つの方向性を謳うべき時期に来ていると思う。これを議論される市の職員の方とか議会の方々にとってわかりやすいのは、新聞に取り上げられているということも重要なんでしょうけれども一番重要なのはプロジェクトを創出したかということだろう。一体どれだけの経済効果を生んでいるのかと。それを判断基準にしてプライオリティを考えるのが一番良いと思う。企業のカバレッジを広げることで、イノベーションエクステンションやコ・クリエーションジャムなどの、企業の新規事業開発をオープンイノベーションで促進していくプログラムがより活性化されると、より大きな数のプロジェクト創出の可能性が出てくると思う。

- ・海外との関係も、最終的にはどのようにしてプロジェクト創出につなげていくかということで判断をしていくことが大事であり、そのような観点で判断基準を明確にすることで 3 年の中での 2 年目を有意義に過ごしていくのが 26 年度に向けて最優先されるべきだと考える。

(校條委員長)

- ・ありがとうございます。私も一言申し上げたいのだが、このプロジェクト創出だが、1～2 年でパッと立ち上がるものは非常に少ないと思う。やっぱり何年もかかる。これはシリコンバレーの例だが創業してから上場するまで平均して 8～9 年なので、2 年目ではそれは期待できない。とすれば、一つは定義。プロジェクト創出したとき、これは今はまだよちよち歩きの状態だが、これだけの数を掛け算すると将来はこれだけの経済効果があるという言い方はある。アーリーステージのものを扱っているのがグローバルイノベーションなのだが、大阪のポテンシャルを活かして誘致事業などを促進していく事でそれも成果としてカウントしていかないとおっしゃるような経済効果という意味での事業創出が出るのは厳しいかもしれない。吉原委員、その辺いかがでしょうか。

(吉原委員)

- ・同感。私は市が助成をしているリターンを明確に掲げるべきだということで申し上げただけで、誘致が進むとかいろんな形で目に見える成果の方がアカウンタビリティを明確にする上で適しているということで、校條委員長の意見と同意見。

(校條委員長)

- ・今の点でも外の点でも結構なので、ご意見いかがですか。松本さん、外村さん。
- ・お考えになっている間に一点私申し上げたいのは、今の話にも関連するのだが、そもそもグローバルということ考えたのは、関西・大阪の中で閉じて人材、アイデア、技術、資金すべてを大阪でという今までの地域ごとの産業振興の考え方ではもう将来立ちゆかないだろうということで、イノベーションゲートウェイという、技術が通り

過ぎてもいいし人材が通り過ぎてもいいし、お金が通り過ぎてもいい、だけど大阪を
通り過ぎることによっていろんなものが立ち上がるんだというのが基本発想なので、
グローバルというのは必ずしも海外ばかりではなくて、意外に東京周辺にも大阪出
身の方がたくさんいて、実は Mof 今所在地は東京なんです。そういうことを考
えると、東京にいる人だっていいじゃないかと。そこのUターンを考えてもいいんじ
ゃないか。情報発信も東京をターゲットにした情報発信が少ないのでその辺考えた方
がいいんじゃないか。それから外村さんからさきほど、地方に出ていくという興味深
い話もあったんで、地方にもなにかやりたいんだけどきっかけがないって人たちが、
大阪に関わってやってみようという風になれば、またそこで東京以外の日本中の人材
がここに集まるということでも力になるし。そういう日本国内も視野に入れたグロー
バルという発想にしたらいかがかと思う。

(松本委員)

- ・事業化、プロジェクト創出という定義に関わることだが、一応定義は書いてあるが、
契約何件とかNDA何件とかよりもそれぞれのプロセスでストックが何件あって、そ
れがプロジェクト創出に向けて動いているということも成果になるのではないか。例
えば、海外の企業が大阪に来るとということもひょっとしたらそこから新しいプロジェ
クトが生まれる可能性が大きくなるということであるから、そういうことも入れてカ
ウントしたら良いと思う。最後は事業化、継続的に利益を生み出すという事業創出に
なるだろうが、それを待っていたのではなかなか難しいので、前に進んだこと自体を
成果という風にカウントしたらどうか。例えば日本に来たということも一つのきっか
けになり、そこから何か生まれることもあるので、そういうこともカウントに入れ
たらどうか。

(校条委員長)

- ・大変素晴らしいと思う。あと論点として二つ方向性があると思っていて、一つはさっ
き申しあげたように無風状態の中でこういう試みをいろいろ進めて、吉原さんがちょ
っとおっしゃったように期待が低かった分、すごくびっくりしたと。やはり驚きがす
ごくあった。「何回も聞きましたけど本当に行政がやっているんですか、これ」とい
うのがすごくあって、ちょっと一般の人が持つ役所のイメージとやっていることの落
差・ギャップが逆にものすごくよかったんだと思う。それは我々としては「してやっ
たり」というところはある。来年、勢いがついて熱がもっともって拡大して広がって
いくという方向性もあれば、1年目はものすごく頑張って、初めてだから皆びっくり
して参加するんだけど2年目からはダレると、そういう可能性もある。どっちでし
ょうかね。あるいは今からそういう心配してもしょうがないのか…何かご意見あればお
願いします。

(外村委員)

- ・論点であった、これまでの活動を継続するのか深掘りするのか、あるいはフォーカス
するのか広げていくのかという点を、この1年間のアクティビティを振り返って考え
ると、大阪市が深堀のために自らのリソースを割いてやらなくてはいけない部分と、

エコシステムの中の誰か、例えばコミュニティのリーダー等にお任せできる部分とに仕分けして、後者にあたるものについてはなるべく省力化することが大事だと思う。後者については、昨年度のそのままか、あるいは今まで以上に回転してもらいながら、大阪市のエネルギーは別で力を入れなくてはならないところにかけていくべきだと思う。

一年しかやっていない現段階では、成功したことをもう一回繰り返したいという思いも働くと思うが、ここまでやったのであれば、取組みを一步進めた方がいいんじゃないかと思う。そして前に進んでも尻すぼみしないために今申し上げた仕分けをぜひやっていただきたい。

それと情報発信の話になるが、限りある資源を活かすという点でいえば、海外を経由した情報発信をしてそこから日本企業を動かしていくという手もある。具体的には、海外の企業が次々と大阪イノベーションハブに来て何かを生み出しているという話を日本で報道して、日本の会社があわてて参加するという流れが作れば良いと思う。日本の会社に直接あれこれ説明して大阪イノベーションハブへの参画を促しても、乗ってこないと思う。それよりは海外の会社や人がどんどん来て、次々に新しい取組みに参加しているのを見せて、危機感を感じてもらうのが効果的だと思う。海外の力を使って盛り上がり方を再広報して、日本の人たちに還流して彼らにも活発になってもらうということ。広報という意味ではそこに力を入れるというのを考えられてもいいかなど。

(吉川理事)

- 先ほど校條委員長から言われたように、来年度の動きに関しては拡大的なところでいくということなのか、別の方に深掘りするかという話もあったが、私は両方していきたいと考えている。先ほど外村委員が言われたように現状今までやってきた者に対してはやはりパートナーを巻き込んだ形で彼らにイベントのスロットを任せていくということに対して本当にやっていきたいと思っている。そのためにはパートナーの満足度、今回数十社に入ってもらっているが、ある種の意図をもって入ってくれている。そういう意味ではパートナー主催の事業の費用対効果という満足度は今後調査するつもりでいる。プレイヤーの満足度についても今後調査していきたいと思うが、いずれにしてもパートナー、プレイヤーの巻き込みで、新しいフォーマットを開発していくというところに注力していきたいと思っている。
- 二点目の論点として、プロジェクト創出支援体制の強化というところがあるが、Moffも大阪で起業はしたが皆さん東京の方に移ったという悲しい現実もある。その原因も調査はしているが、ある意味では十分なコミュニケーションができていなかったのではないだろうかという反省もある。我々としてはその辺をどういう形でまわすのがいいのかと、そこが深掘りすべき今後の課題と思っている。いわゆるアドバイザーの巻き込みというところになってくるのだが、この体制をどうしようかなと考えている。
- 三点目の論点としては、海外との連携だが、これは本当に強くやっていきたい点で、前回、シリコンバレーツアーに学生たち 30 人と若手起業家を連れて行って感じることは海外の人たちと双方向でワークショップしていくような場数を踏ましてやらなくてはと思っている。そういう意味では前回シリコンバレーツアーに行った際には、

領事館の方々とも出会いがあり、ボストンには自治体が窓口になって申請するようなプログラム制度があるからというような情報もいただいた。そういったあらゆる機会を通じて海外との連携をつなげていって基本的には大阪から海外に出ていくという当初の設計通り、海外に行ってもらおう。大阪にとどまっていたかなくても結構ですと。ここに来れば海外の情報が一番集まりやすいんだ、チャンスがあるんだという状態をぜひ作っていきたいと考えている。そういう意味では、HackOsaka2014を英語で全部やったときに2~3割の外国人の方が来られた関係で、その後外国人の方々がこちらに来るようになった。その関係で来年度はぜひ国際ハッカソンというか、ここでやるハッカソンでも半分以上が外国人・留学生、半分以上が日本人というような国際的なワークショップのようなものをぜひ実現したいなと考えている。

(校條委員長)

- ・ありがとうございます。これに対してまたご意見をいただきたいんですが、先ほどの外村さんの手離れを良くしていこうという話なんですが、これ総論はもちろん賛成ですが、加減が難しい。これは手放すんだけどこれはまだ手綱引いておこうとか。そういう風に考えると私は機動的な動きが大事だと思う。やってみて、手放しちゃうと糸の切れた凧みたいに飛んでっちゃうんじゃないかってことであればそこでまたホールドするというか、かなり臨機応変な動きが必要だと思うんで、そこが大阪市としてはチャレンジのところかなという印象を持った。

(吉原委員)

- ・皆さんのおっしゃることを参考にさせていただいて、事務局の方には26年度の計画として総花的にいろんなことをいっぱい書いていただくのではなくて、ちゃんとプライオリティをつけて目標をはっきりと謳っていただいて、26年度のパフォーマンスメジャメント、目標設定とアウトカムについてメリハリをつけて作っていただきたいと思います。もちろん外村委員や校條委員長がおっしゃったように機動的に走りながら考えて変えなければならぬところは順次敏速に変えていただければいいと思うが、あれもこれもという書き方ではなくてちゃんとプライオリティがはっきりしていればありがたいと思う。

(松本委員)

- ・これは委員というよりもオープンイノベーションを推進している一企業としての希望なんですが、特に海外との関係ですね。このネットワーク、確かにコミュニティも大事だが、ここから材料であるとかバイオ関係であるとか、我々のシーズを医療の分野に事業化するというミッションを与えられたものですから、特に海外との提携関係を結びたい。ここを拠点にして海外のいろんなところに我々が持っているシーズをうまく発信できる仕組み・ネットワークを作っていただければここへきてオープンイノベーションをやりたいと思っているのでぜひそういう海外に発信できるような強いネットワーク、海外との強いコミュニティを作ってほしい。イベントをやるのも結構なのだが、実質的なことができる仕組み・場を作っていただければここでやりたいと思っている。

(事務局)

- ・規定の時間となったので、こちらで第3回イノベーション促進評議会は終了させていただきます。
- ・委員長及び各委員には本日の資料を平成26年3月末時点のデータに修正したものをお送りするので、そちらに基づいて、最終的な評価とともにコメントを頂戴したい。
- ・評議会としてのご意見のまとめについては委員長にご一任いただくということでご了解願いたい。

(校務委員長及び各委員)

- ・異議なし

以上